

Title	ウナムノ研究メモ
Author(s)	吉田, 秀太郎
Citation	大阪外国語大学学報. 15 p.255-p.267
Issue Date	1965-02-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80249
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ウ ナ ム ノ 研 究 メ モ

吉 田 秀 太 郎

Apuntes sobre Unamuno

YOSHIDA - Hidetaro

Sumario

El trabajo que aparece a continuación son, como reza el título, apuntes sobre don Miguel de Unamuno, figura cimera del pensamiento español contemporáneo. Es, por lo tanto, una colección de datos fundamentales para empezar a estudiar la personalidad de este gran escritor español. Comprender a un hombre de tan alta cultura y de tantas obras de tan variados géneros como a Unamuno no es empresa fácil. A pesar de los estudios realizados hasta hoy día por los unamunistas, nacionales y extranjeros, tengo la convicción de que faltan aún muchísimos aspectos que ver para aproximarse a perfilar a Unamuno como "hombre de carne y hueso" y como hombre de letras.

Si mis apuntes de varia lección despertaran en el lector alguna curiosidad hacia la vida y la obra de Unamuno, tendrían la única justificación de haber sido publicados.

序にかえて

ウナムノに關しての研究は年を追って盛んになってゆく様に思われる。これまでも相當な文献が發表されたが、国内よりもむしろ欧米の諸外國での研究の方が、量的にも優れている様に思われる。今年は、ウナムノの生誕百年祭にあたるので、各地で記念行事が行なわれている。私が今年の春訪れたサラマンカ大学は、彼が長らく教授、學長を勤めていた關係上、ウナムノの研究には非常な力の入れようである。内外のウナムノ研究家たちによる講演が、すでに今年に入ってから、この講演で數度行なわれている。彼の思想的な傾向が、現在のイスパニアの政權と必らずしも一致しないため、或る面では相當な制限が間接にはあるが為されていることは事實である。しかし、ウナムノが、オルテガと共に現代イスパニアの思想界を代表する人物である事には疑う余地がない。彼は優れた思想家であつたと同時に、作家として、又詩人としても高く評価さるべき人であつた。本稿では、人間ウナムノの研究に當って、その基礎ともなるべき事柄を整理し、メモし、そこにある諸問題を明らかにすることによって、これから先、ウナムノの評価にあたっての一つの抛りどころとしたいと考えている。彼の様に、詩、小説、劇作品、隨筆、哲學的ないしは宗教的な論文・評論など極めて多岐にわたる分野に活躍し、更に実生活の面でもエピソードに富む人物を見極めようとすることは、まるで大森林に向かうように、容易なことではない。そこで、私は、ただ将来どの程度まで達し得るかは別として、私なりに、その森に入っていくと考えたわけである。従って、本稿は、飽くまで、その森林へのアプローチに過ぎない。

(1961年9月20日)

若き日のウナムノ

ウナムノ (Miguel de Unamuno) は1864年9月29日、イスパニアの東北部、バスク地方の、ビルバオ市に生まれた。今ではこの国屈指の工業都市であるが、当時はまだ静かな町であつたらしい。父は若い頃、メキシコに渡り、財をなして郷里に歸つてきた、イスパニア人の間では言うところのインディアノ (indiano) であつたが、ウナムノがまだ6才のとき他界した。そこで彼は、熱心なカトリック教徒である母親の腕一つで育てられた。後年、彼がイスパノアメリカの歴史や文学、風物などに深い関心を示すようになったのも、彼の父から聞いた話や彼が持ち歸つた可成りの書物を読んだりしたことによるものと思われる。¹⁾

1) ウナムノと、北米をも含めて新大陸の作家や文化人たちとの交友關係その他、彼の中南米文学に關する論文について、最近、ウナムノ研究家として有名な Mannel García Blanco 教授が、Gredos 社から、「アメリカとウナムノ」と題した、興味深い研究を發表している。

少年期の彼の心に最も大きな印象を残したのは、何と云っても、1834年の、カルリスト戦争である。1875年、内乱もようやく終盤に近づいた頃、彼は、初等教育を終えて Instituto Vizcaíno に学んでいた。ウナムノは、ビルバオの市街が爆撃される様子を、自宅から眺めていた。この時の彼の周辺や、子供心に感じたことがらを、彼は、「幼き日の思い出」と題する半生記の中に生き生きと書き綴っている。¹⁾そして又、この時の印象が、やがて、1897年に出版された、彼としては最初の小説、「戦争の中の平和」²⁾となつて再現されるわけである。この小説の中の主人公 Pachico Zabilbide は、若き日のウナムノの投影である。Instituto 時代、彼は修辞学、数学が得意であった。心理学、論理学、倫理学なども学んだが、心理学が最も彼の興味をそそぐたと、例の、「幼き日の思い出」の中でウナムノは述懐している。熱心な読書家で、内外の思想家の作品、特にヨーロッパの新しい思想書に読み耽った。幼少の頃、教えられ、命ぜられるまゝに培われた宗教心、カトリック的な信仰を理性によって把握しようとしはじめたのは、この頃のことであった。この当時の様子を彼は、こう語ってくれる。

「私は昨日まで馬鹿げていると思われていた書物ではあるが今日では真実なものとして尊ばれている私の読んだ最近の作品に夢中になった。私は永遠の問題を解明しようという猛烈な意欲の虜となった。私は一つの思想から他の思想へと移り歩いた。そして、この絶え間ない往き来は、私の中に孤独な懐疑主義的思想を懐胎せしめる代りに、人間の知性に対する信頼を一層高め、真理の光明に何時かは到達するという希望を一層与えることになった。『何事も正しくは知り得ない』というに至る人々の多い中で、私は、あらゆるものはその理由をもつている、そして、我々にそれが理解出来ないのは大変残念なことだと思うようになった」³⁾

カント、デカルト、ヘーゲルの存在を知ったのも、この頃のことであった。彼は、父の書斎にあった Balmes や Donoso を読んだのである。この様にして、次第に、これまでの宗教的な雰囲気とは異質の思想に接しはじめたウナムノは、その何れを選ぶべきかについて、迷い、苦しむ。彼のこの苦悩は、「戦争の中の平和」に現われる Pachico Zabilbide の苦しみとなってその姿を見せている。⁴⁾

1) Miguel de Unamuno : Recuerdos de niñez y de mocedad; Espasa-Calpe, Madrid, 5a ed., 1953, pp. 75~78. (初版は1908年)

2) Miguel de Unamuno: Paz en la guerra; 本稿では以後, Espasa-Calpe, Madrid, 6a. ed. 1960. を用いる。

3) M. de Unamuno : Recuerdos de niñez y de mocedad; 第二部の五. pp. 105~6

4) M. de Unamuno : Paz en la guerra ; P.51

1880年、彼がマドリード大学の文学部に入学した頃には、当時のイスパニアの思想界にはSanz del Río によつてもたらされたクラウセ (Friedrich Krause) の哲学が支配的であった。ウナムノと同時代の作家たちにも、クラウセの思想は及んでいた。しかし、その影響の仕方は、必ずしも直接的なものではなく、Pedro Oromí も指摘しているように、共通していると考えられる点は、ただ両者の間における宗教的な態度においてだけであった。¹⁾ ウナムノは、一時、スペンサー (Spencer) に傾倒したが、飽き足らず、やがて、キルケゴール (Søren Kierkegaard) の作品に接するに及んで、彼の思想に大きく影響を受ける。特に彼の実存主義的な思想はこのデンマークの神学者に負うところが多い。ウナムノの代表的な論文「人生の悲劇的感情について」²⁾ の中にそれが最もよく伺える。

キルケゴールのウナムノに与えた影響について、最近、Jesús Antonio Collado が「キルケゴールとウナムノ」と題する論文の中で、可成り詳細にわたって研究している。³⁾ Antonio Sanchez Barbudo も、「ウナムノとマチャドの研究」に於いて、この両者即ちウナムノとキルケゴールとの深い関係を指摘している。⁴⁾ ウナムノ自身の言葉を借りてみよう。嘗て、冗談まじりに彼はこんな事を言った。

「あるとき、私の事をよく知らない男が私の部屋に入ってきて、机の上に全14巻の、キルケゴール全集を置いてあるのを見て、『あれは何ですか』と聞くもんだから、私は『あれは私がデンマークに住んでいたとき書いたものですよ』と答えてやったところが、『へえ！あなたはデンマークに住んでおられたことがおありですか？』ときたね。そこで私は更に真面目そうな顔をして『そうですよ、私はあそこに生まれ、1855年に死亡しました。そして九年の後、ビルバオで生まれ代ったってわけです。その前にも、ちよくちよく、他の国で死んだことがありますね』と言ってやった時のその男の顔、これは何時まで経っても忘れないだろう。』⁵⁾

当時、ヨーロッパの諸国でもまだ余り知られていなかったキルケゴールの作品を、しかも原語で読破し紹介した彼の語学力も大したものであったと言わねばならない。彼はこの他にも英、仏

1) M. Oromí : El pensamiento filosófico de Miguel de Unamuno; Madrid, 1943, P.51.

2) M. de Unamuno : Del sentimiento trágico de la vida; Madrid, 1913.

これは最初「神の愛について (Tratado del amor de Dios)」という題になる筈であった。

3) Kierkegaard y Unamuno; Ed. Grados, Madrid. 1962

4) Estudios sobre Unamuno y Machado; Ed. Guadarrama, Madrid, 1959 pp. 65~79

5) Miguel de Unamuno : De esto y de aquello; IV, Bs, As, 1952, p. 504

独その他多くの外国語をマスターしていた。彼の随筆、「ドン・キホーテの生涯」の序文の中で彼のこの作品を英訳したアメリカの学者が、ウナムノの文章にセルバンテスの原作と矛盾する箇所があるからといってウナムノ宛てに出した手紙への返事代りに、実はセルバンテスの方が間違っているのだと指摘し、彼は、セルバンテスが参考にしたというアラビア語の文献を調べてみた」と述べ、この言語にも通じていることを明らかにしている。¹⁾

ウナムノの人間的形成の過程における重要な一時期である大学生活について言うなら、ここに注目すべき事実がある。それは、彼が、彼と同時代のいわゆる98年代の作家たちと同じく、大学での講義からは、殆んど直接には何ら得るところがなかったということである。ウナムノが、上記の文学グループの中に入れられる理由の一つは、María de Maeztu の言っているところに従えば、²⁾ 実にここにある。

話が幾分前後するが、1884年、大学を卒業したウナムノは、母と恋人ゲルニカの住んでいるビルバオ市に戻ってくる。この頃、すでに彼は、地方紙に文芸評論などの記事を送っている。ビルバオで数年間彼は「田舎教師」として過した。そして1891年、彼は再び故郷をあとにして、今度は、同じカスティリア地方でも北西部にあたるサラマンカにやってくる。その年、彼は古い伝統のあるこのサラマンカ大学のギリシヤ文学担当教授として迎えられた。というよりも、その椅子をめぐるの激しい競争試験（Oposición）の結果であった。事実、彼はその前にも二三、この種の試験を受けている。

サラマンカとウナムノ

サラマンカはカスティリア地方北西部の、トルメス川の畔に広がる丘陵地帯にある、人口十万そこそこの、ひっそりとした都市である。一歩郊外に出ると、見渡す限りの平原である。カスティリアの大地は荒涼としていて、彼の生れた北部イスパニアの、緑と起伏に富んだ自然とは極めて対照的であり、そこに住む人には、一種の孤独感を与える。彼ははじめ、この「化石となった海」(mar petrificado)³⁾ に、少なからぬ抵抗を感じたようである。しかし、やがて、彼の魂に訴えるものが、この荒涼たる、厳しい平原にはあることを彼は悟るのだった。かくして、彼が、その生涯の殆んど大部分を過すことになったこのサラマンカの風土は、若し哲学者 Keyserling

1) Miguel de Unamuno : Vida de don Quijote y Sancho; Madrid, 1905 p.10

2) María de Maeztu : Antología siglo XX Espasa-Calpe, 1943, p. 24

3) Miguel de Unamuno : En torno al casticismo; Espasa-Calpe, Madrid, 5aed, 1961, P. 54

の言つた言葉「そこ（カスティリア）に住む人々は頑強で、同時に空想家であり、しかしとりわけ生命への飢えを感じている」が正しいとすれば、ウナムノの人間的な形成に少なからぬ影響を与えた筈である。カスティリアの印象を記述した彼の最初の作品は、「純正主義をめぐって」（1895）であるが、そこには、この様に書かれている。

「この景色は、生きることの喜びを味わせる快い感情を抱かせることもしなければ、望ましい快適さや楽しさをもたらししてくれることもしない。臥して、手足を延びのびとさせたい気持ちが自然と湧いてくるような、緑に充ち溢れる平原でもなければ、我々の憩いの場として、我々に呼びかけてくれる土地のひだももっていない。

我々は、その景色を眺めていても、我々すべての者の心の奥底に眠る動物を意識させない。その動物的な眠りから少しばかり目を覚まして、見事に生い茂った植物の広がる平原を前に、肉の満足感を味わう動物を意識させない。心に憩い（recreación）を与えるような、そんな自然ではない。それは、我々をして、この貧しき大地から離反させ、純粹で赤裸々で、そして一樣な大空に、我々を包みこむ。こゝには自然との共感はない。むしろこの自然が、その素晴らしい豊かさの中へ、我々を吸収する。言うなれば、汎神論的である以上に、この無限の原野は一神教的風景である。人間はその無限の平原の中に、消え去ることなくして縮小され、平原の乾燥の真只中であって、魂の渴きを感じる。」¹⁾

サラマンカは、ウナムノにとって極めて必要であつた孤独感（soledad）を与えたのである。彼が、心の内部に向かつて進んでゆくために是非必要であつた孤独感が、この平原にあつた。

ギリシャ語の教授として就任したウナムノであつたが、大学では、García Blanco 氏の言によれば、イスパニア語史を教えていたようである。彼が多くの外国語をマスターしていたということは、これまでに既に述べた通りだが、これを純粹に、学問の対象として研究していた事も、見逃してはなるまい。いわゆる語学者としての彼のイスパニア語に対する関心は高いものがあつた。サラマンカから外に出る時は何時も、旅先の各地で耳にした新しい語法や、単語などを克明にノートした。Morton 氏の、この点に関する研究は注目に値する。²⁾

ウナムノが、公式にはギリシャ文学担当の教授であるに拘らず、その方面の研究書乃至著書が全く見られないという事実は、これまで、多くのウナムノ研究家たちによって指摘されていると

1) En torno al casticismo; Espasa-Calpe, Madrid, 5a, ed. 1961, P. 51

2) Fernando Huarte Morton: El ideario lingüístico de Miguel de Unamuno; Cuaderno de la cátedra Miguel de Unamuno, No.5 Salamanca. 1954

ころである。しかし、ウナムノ自身にとって、それは故あってのことであつた。次の言葉は、彼の立さ場を明らかにするものとして重要なものであると考える。

「われわれには、どうも彼（ウナムノ自身のこと）が、なぜ学者（sabio）という名誉ある名称が気に入らないのか、また、あんなに頻繁に文章を書くくせに、而もギリシア文学の教授でありながら、それについて、なるべく書かない様に気を配っているのかわからない。若しや彼は、十分な知識を持ち合わせていないため、公式には教授となっている科目についての弱点をさらけ出すのがこわいのだろうか？ 何とも言えない。」

これは、彼の作品「愛と教育」（Amor y pedagogía）（1902）の序で、彼が自分の作品を第三者の立場から紹介しながら述べた言葉である。彼が、いわゆる「学者」として位置づけられるのを極度に嫌っていたこともこれでわかるが、それよりも、自分から発した先述の様な疑問に対して、後に別な機会を設けて返答をしていることの方が興味がある。

「私は学生たちに教えるためには充分すぎる程、ギリシヤ語を知っている……そして、ギリシア文学に関して知られている最も重要な事柄を教えることも出来る。それとは別に、私は、国家のために有益であると考える事から避けなければならないとは考えない」¹⁾

即ち、ウナムノには、彼の専門領域に、当然の事ながら自信をもっていた。しかし、彼にとっては、それよりも更に重要なことが、国家のために為されなければならなかったのである。ウナムノの伝記作者 Luis S. Granjel は、嘗てウナムノの学生であつた Hernán Benítez の言葉を引用して、ウナムノの大学人としての素顔を見せてくれる。それによると、「ドン・ミゲルは、教授と言うよりも、学生の精神的指導者としての役割りを果していた。学生たちは、彼らの良心の窓を大きく開いて、彼から、人生を深く生きることを学び取った」²⁾ のであつた。

事実、ウナムノは、大学での講義の傍ら、（1891年には学長となっている。以後、前後二回にわたり政府との対立からその椅子を追われたことがある。その中、二度目には国外追放を命ぜられている）、実に数多くの作品を発表した。そして、その内容も、「人生の悲劇的感情について」（Del sentimiento trágico de la vida）の様に哲学的なものから、「キリスト教の苦悶」（Agonía del Cristianismo）の様に宗教的なもの、「ドン・キホーテとサンチヨの生涯」（Vida de don Quijote y Sancho）の様な評論をはじめ、「ベラスケスのキリスト」（Cristo de Velázquez）の様な詩、更に「戦争の中の平和」（Paz en la guerra）、「霧」

1) Miguel de Unamuno : Sobre la erudición y crítica; Ensayos, Ⅲ, 1905

2) Luis S. Granjel : Retrato de Unamuno; Ed. Guadarrama, Madrid, 1957, P. 118

(La Niebla), 「アベル・サンチエス」(Abel Sánchez)などの様な小説や、「スフィンクス」(La esfinge)など、劇作品にも及んでいる。単行本として出版されたもの以外にも、多岐の内容にわたる論文や記事を、内外の新聞、雑誌に寄せている。¹⁾

サラマンカでの彼の生活は、むしろ、外面的には単調に見えるまでに、平静そのものであった。しかし、彼の心の奥底には1897年における宗教的危機以来、理性と信仰との抗争が続いていた。彼は一方、その特異な性格からも当時の国内は勿論、ヨーロッパの諸国においても知られる様になった。政治的関心の強かつたことは、いわゆる98年代の作家たちに共通した特徴の一つでもある。彼は理想主義者であった。セルバンテスの不朽の名作、「ドン・キホーテ」に魅せられた所以も、そこにあると思われる。彼の、政治的関心のほどを示すエピソードとしては、1906年の、サルスエラ劇場での出来事が挙げられる。Azorínの招待によってマドリードにやってきたウナムノは、例の劇場で、当時言論の自由を規制する法律の出された事に関して、痛烈な攻撃を政府に加えたのであった。²⁾そのため、彼の演説内容をめぐって、国内で大きな論争が持ち上がった。その他にも、彼が書いたこの種の記事や論文は、常に大きな問題を投げかけることになり、そのため、議会に於ても、サラマンカ大学学長としてのウナムノの態度が問題とされたことすらある。1914年9月、遂に彼は、Bergamín文相の折、理由にならない理由の下、学長の座を追われる身となった。翌々年に予定していた南米行きの計画は、これで立ち切れとなり、結局、ウナムノは生涯一度も新大陸の土地を踏まずじまいであった。それ以後に見られる彼の政治活動には一層激しいものがある。1924年、Primo de Riveraの独裁政治の時代、ウナムノは、カナリア半島のフェルテVENTOURA島に追放される。1930年、解除され、祖国へ帰るまで、彼はフランスへひそかに脱出していた。その間6年。彼は、1935年12月31日、市民戦争が始まって間もない頃、靈魂の不滅を希いながら71才の生涯に終止符を打つた。大勢の子供や孫たちに見守られながら世を去った苦悶の人、ウナムノは、彼の作品が読まれる限り、そして、彼の子孫の続く限り、それらの中に生き続けることであろう。

1) 新聞、雑誌などに掲載されたものは、García Blanco氏によって、その茫大な量の作品が整理され、解説が施されて、De esto y aquello という題のもとに、全6巻ものとしてBs. As.のEd. Sudamericanaから出版された。(1950~55) また、最近Aguilar社から全集(15巻)が出た。

2) この時の演説の内容や、劇場の雰囲気についてはRamón Gómez de la Serna著、Azorín; Ed. Losada, Bs. As. 2aed., 1948, pp159~162に詳しい。

作家としてのウナムノ

ウナムノの精神的活動の分野は、既に見た通り、広範囲にわたっている。従って、彼の有する特性を一語で表わすことは不可能である。彼が秀れた詩人であることは疑いのないところであるし、小説家であることも、その数多い作品から、伺うことが出来る。更に、彼の随筆家としての力も高く評価さるべきである。ただこゝで問題となるのは、彼の作品に見られる思想、哲学的、宗教的思想である。このために、しばしば、或る与えられた作品が、特に哲学的、宗教的内容をもっている場合、彼を哲学者、思想家の範疇に閉じ込めるのによい口実を作っているようである。しかし、彼は、哲学者であるよりも、本質的には作家であり、詩人であると考えべきである^ろ。ウナムノ研究の第一人者 Julian Marías 氏は、彼の、ウナムノ研究書の中で、なぜ彼が哲学者たり得ないかの理由として、その思想的体系の欠如を挙げている。彼の作品には、部分的には哲学的であるが、いわゆる哲学という、学問としての思想体系がないからである、以下、少し長いが、ウナムノの思想の研究に当つて、上記の、J. Marías の言葉は、参照しないわけにはゆかない。

「ウナムノにとって、哲学と言うより、哲学の問題は存在していたと言えるであろう。しかし、この事は、ウナムノの知的活動の結果が、厳密に哲学の名に値するかどうかについての予断を許すものではない。私の述べんとするところは少なからぬものがある。大部分の人々にとって、哲学の諸問題は存在——問題的に存在——しない。それらは往々にして、知識、好奇心、或いは感化のための材料であって、ただそれだけである。このことの他に、幾つかの場合においては、哲学的諸問題の理解、すなわちその本来の意義の意識というものがある。大方の哲学の教授たちは通常、この様な態度に関係している。これとは別に、又それにも増して、ウナムノにはそれらの問題に関連して生きてゆくために必要な現実的にして且つ個人的な急務があった。しかしながら、これとても充分ではない。哲学の諸問題は非常な力と鋭敏さで感受され得るが、それにも拘らず、真の哲学的行動に至り得ないものだからである。哲学は独特な形でではあるが厳密な意味において、「知ること」(saber) である。従って、決して他のものと混同されてはならない。その問題に対する最も本物の、そして生き生きとした感受性とさえも、混同してはならないのだ。」¹⁾

以上のようにウナムノの作品が、その頻繁な哲学的、神学的思想への言及や、色々な言語によるその種の引用にもかかわらず、本質的には、文学作品であることを認めている。また、

1) J. Marías : Miguel de Unamuno ; Espasa-Calpe, Madrid, 1960 (pp.19~20)

José Miguel de Azaola も、彼の論文「死に対するウナムノの五つの闘い」の中で同様のことを強調し、彼の最も哲学的と思われる作品「人生の悲劇的感情について」や、最も宗教的だと考えられる「キリスト教の苦悶」において、全体的な体系を欠くため、失敗作となっているのに対し、単なる文学作品と考えられる小説では、その目的を達成していると述べている。¹⁾

然しながら、これとは別に、ウナムノ自身は、いわゆる「分類」(clasificar) されることを極めて嫌う人であった。(これにまつわる面白いエピソードもある) すなわち彼は、自分が、あらゆる特質を兼ね備えた完全なる一個の人格であることを常に明らかにすることをいとわなかった。彼は、その特質なるものが傾向として相反するものである様な場合を、我々に見せることがある。そのためにウナムノは、批評家たちの間で、「矛盾に富む人」(hombre de contradicción) と呼ばれている。ウナムノが、分類されることを嫌うということに、彼の多作、多面的活躍の理由があるとも考えることも出来るであろう。Agustín Basabe は、ウナムノが、彼の作品、特に小説を呼んで novela 「小説」と言わないで、敢えて nivola (別に意味があるわけではない。ウナムノはただ、普通の novela とは違っているのだということを、綴字の違いで以てわからせようとしただけである) と言った事の理由として、彼がいわゆる小説家として分類されるのを嫌ったことを挙げている。²⁾ しかし、この説には、俄かに賛成し難いものがある もし仮にそうだとすれば、ウナムノは、ひとり小説だけに限らず、あらゆるジャンルにおける作品において、同様な態度をとつたに違いないと思われるからである。

さて、ウナムノが、多分に哲学的内容をもってはいるが本質的には作家であることは既に見た通りであるが、こゝに作家としての彼の特質を審かにしたい。結論的に言つて、ウナムノの作品には、その外面的な多面性にも拘らず、或る一つの、それらすべてを貫く思想がある。即ち彼のすべての作品の中核をなすテーマは唯一つである。それは、彼の、生きんがための悶え (angustia vital) であり、生命の永遠性への希求と、肉体としての人間の滅亡という明白な事実を前にしての不安と恐怖、即ち、生と死に関する問題をめぐつての彼の心の苦悶である。永遠の魂、靈魂の不滅に対する彼の情念と理性との間にもち上がる抗争である。1897年におけるウナムノの経験した宗教的危機が、つまりは、この時以後1900年までの彼の作品の直接のインスピレーションとなり、また、それ以後も、彼の思想に、かくれた泉として働きかけたわけである。³⁾

1) Las cinco batallas de Unamuno contra la muerte; Cuaderno de la Cátedra M. de Unamuno, II, U. de Salamanca, 1951, pp 39~40

2) A. Basabe : Miguel de Unamuno y José Ortega y Gasset; Ed. Jus, México, 1950, P. 46

3) A. Sánchez Barbudo : Estudios sobre Unamuno y Machado ; La crisis de 1897 : Ed. Guadarrama, Madrid, 1959, pp. 75

そもそも彼が物を書いたのも、彼の、この様な哲学的な思想、即ち生と死とに関する問題から、彼が永遠の生命を得んがための一つの手段に過ぎないとすれば、小説においても同じ様なことが言える。彼は、読者と共に永遠に生きようと考えたのである。小説に例をとれば、彼の作品に登場する人物の中には殆んど言ってよい程、生命を絶つ者が現われる。「霧」の中のAugusto Pérez 然り。¹⁾「殉教者、聖マヌエル・ボエノ」²⁾においても、主人公の死が、この作品のやま場となっている。「愛と教育」³⁾では、Carrasco と Marina との間に生まれた Apolodoro は、両親の期待を裏切つて自殺する。又、「アベル・サンチエス」では、恋人 Helena を、友人 Abel Sánchez に奪われた主人公 Joaquín の心の中の闘い、憎しみと、それを昇華させようとする意志との板ばさみとなつて苦しむ姿を、彼の死に至るまでにわたって描いている。⁴⁾「トゥーラ叔母さん」⁵⁾においても、妻の Rosa を失なつた Ramiro が、彼女の死をめぐって回想し、その回想の中に、Gertrudis という女性を浮び上がらせている。この様にして、ウナムノの作品には、生と死との問題が絶えず底流として存在している。José Miguel de Azaola は、例の、「死に対するウナムノの五つの闘い」の中で、永遠の生命を希うウナムノのとつた基本的な五つの態度として、次のものを挙げている。⁶⁾

1. 自己の人格を人々の集団的な人格と重ね合せることによってその永遠性を保とうとする。
2. 自分自身の再生、これには生きた肉と骨の再生（子孫）と、弟子あるいは彼の思想の後継者といった、精神的な面での再生の二通りがある。
3. 名声とか、栄光といった、人々の記憶の中に生き永らえようとする。
4. 「人生の悲劇的感情について」に見られるような、現在を越えた生命の中に、不滅の魂として生き永らえようとする。
5. キリストの中に生き永らえよう、神性たる救い主が十字架において死に克ったその勝利に加わらせてもらおうとするもの。

要するに、ウナムノの作品は、死に対する彼の絶望的な対策の一つなのである。こゝにウナムノの小説の特異性がある。彼の小説に、いわゆる叙景の欠けていること、背景も、風俗の描写もなければ、場所も、時も、明確でないこと（「戦争の中の平和」は例外）の理由は、そこにあるわけであつて、彼にはそれが必要ではなかつたのである。

1) Niebla, 1914

2) San Manuel Bueno, mártir, y tres historias más, 1933

3) Amor y pedagogía, 1902

4) Abel Sánchez, 1917

5) La tía Tula, 1921

6) Cuadernos de la cátedra Miguel de Unamuno; II, Salamanca, 1951, pp. 55~56

「肉、骨、岩、水、雲、その他目に見える一切のものの核心だけを与えることによって、真実にして最も内的な現実が与えられ、読む者をしてそれを空想でおゝわしめることが出来る」¹⁾

と彼は、その創作態度を明らかにしている。更に、別な機会にも²⁾「戦争の中の平和」の序文で「この小説の中には風景画があり、時間と空間との描写がある。私はあとで、このやり方を止め、小説を、時間と空間の外に、がい骨の形で、又、内的なドラマ風にすることにした。従って、風景や、雲のたゞずまいや、海の様子などの描写は、他の場所で行なうことにした。私の書いた小説「愛と教育」、「霧」、「アベル・サンチエス」、「トゥーラ叔母さん」、「模範小説三題」その他の小品において、私は、人間の行動や感情の発展を述べることによって、読者の気持ちを外らしたくなかつたのである」と言っている。Julián Marías も指摘しているように、ウナムノのとつている彼の作品に対する態度は、恰も天地創造の神としてのそれであり、彼が問題としているのは、作品そのものよりも、その中に生きる人物なのであつて、これは、彼が、別の、永遠なる精神的自己を希求して止まなかつた抑え難い気持ちのあらわれであり、ウナムノの作品が、個人的であり実存的であるゆえんはこゝにある。³⁾「戦争の中の平和」だけが例外である理由は、この小説がその主人公として、特定の人物ではなく、ビルバオ市民というカルリスト戦争の舞台となっている都市に住む集団的な生命をもっているからである。「戦争の中の平和」は、小説としては彼の処女作である。⁴⁾それ以後のウナムノの小説は、次第に集団的なものから個人的なものへと移行していることがわかる。これは、彼の思想の推移から考えてうなずけることである。

ウナムノの小説の特徴は、これまでに述べたような、彼の生命の永遠性を求める手段の一つとして書かれているということゝ、それに直接に関連して、彼の作品に現われる人物と、作者であるウナムノとの密接な関係である。「戦争の中の平和」における Pachico Zabilbide が若き日のウナムノの姿を彷彿とさせることは、最初に述べた通りであるし、「霧」における Augusto Pérez は、Eugenia に恋して破れ、死に至るが、その時の彼と、作者ウナムノとの間に交された対話⁵⁾は、ウナムノ自身の自分に向つての対話 (autodiálogo) に他ならない。アウグスト

1) San Manuel Bueno, mártir, Bs. As. Espasa-Calpe, 1945, pp. 9~10

2) Pa: en la guerra : Prólogo, P. 9

3) Miguel de Unamuno; Espasa-Calpe, Madrid, 3a ed. 1960, P.40

4) この作品の前にも (1895年頃)、「新世界」と題する小説を書いたが発表しなかった。(Armando F. Zubizarreta : Tras las huellas de Unamuno; Taurus, Madrid, 1960 pp. 47~64)

5) Niebla ; 第31章, pp 147~145

を取り巻く世界は、茫漠たる霧の中の世界であり、それは又ウナムノの世界でもある。第三章，第七章における，時間と人間とに関するアウグストの，ハムレット式の言葉は，ウナムノの思想の申核をなしている。「アベル，サンチェス」におけるホアキンの立場も，作者ウナムノの思想的立場である。